衛生局支部ニュース

えいせい

ＮＯ．３３　２０１１年３月２２日発行
発行責任者　森越　初美
ＴＥＬ　０３－５３２０－７４１２(直)
内　線　６３－２１０
ＦＡＸ　０３－３３４９－１５０２
Eメール　info@eiseikyoku-shibu.com
ＵＲＬ　http://www.eiseikyoku-shibu.com

東日本大震災

災害された方など、被災地への救援　募金）を訴えます

３月１１日発生した東日本大震災は、日本での観測史上最大の巨大地震とされ、地震と津波による被害は甚大なものとなっています。衛生局支部は、痛ましい犠牲となった方々に対し、謹んで哀悼の意を表するとともに、被災者の皆さんに心からのお見舞いを申し上げます。

いま、何をおいても緊急に求められているのは、命の危険にさらされている方々、行方不明の方々の救助と捜索を行うこと、火災災害や、原子力災害などの危険を除去するために全力を挙げることです。

衛生局支部は、自治労連・全労連を通して政府があらゆる手段を尽くすことを強く要請していきます。

同時に衛生局支部組合員に訴えます。今回の地震、津波災害で被害を受けた方々を救援するために、被災地への救助募金を訴えます。

春ナースウェーブで署名と募金活動

署名229筆、募金84，968円

衛生局支部は、病院支部、養育院支部、東京医労連など86名で3月19日、有楽町駅頭で毎年春闘時期に行われる春のナースウェーブで、「医師・看護師を増やせ」の署名とともに、東日本被災地への救援募金に取り組みました。

署名は229筆、募金は、84，968円集まりました。

募金をお願いしている高橋書記長

募金を呼びかける支部長森越

衛生局支部は、３月１１日の震災に対して、職員の服務の取り扱いについて、都庁職と福祉保健局・病院経営本部に４点の要請を行っています。

いくつかの改善がされているので報告をいたします。

一　臨時的に届出と異なる経路での出勤にかかる経費は、通勤手当または旅費として支給すること。

帰宅困難予想時に、早期退庁を許可した職員の服務については、特例措置として時間休暇にカウントしないこと。

二　３月１１日、職員には「待機」と指示したにも関わらず、「災害業務に対応するため」ではなく、「職員の帰宅の安全を考えての措置」として、超勤扱いにはしないとしているが、管理者による命令には変わりはないため、超過勤務として取り扱うこと。

三　「災害対応にかかわる業務について、所属の指示により待機を行った場合は超過勤務とする」としているが、これを理由に通常業務の超過勤務手当てを制限しないこと。

四　原発事故を鑑み、派遣された職員の健康状態を十分把握し、場合によっては必要な健診を行うこと。それにかかる時間は保障すること。

一　３月１４日からの臨時的経路での出退勤は、旅費扱いとする。

二　３月１１日、職員の待機については、超超過勤務を行った方については、超勤扱いとする。

緊急措置として、臨時に試行される勤務時間については、**「勤務の割振りについて強制にわたるようなことはしない。」**としています。

震災は天罰」発言に断固抗議する

石原都知事は、東日本大震災を「天罰だと思う」など暴言を吐いています。陳謝したとはいえ、被災された方、亡くなった方に対しての哀悼の思いが全く感じられません。都知事の発言として許せるものではありません。

東京都として、被災者援護のため全力を尽くすべきです。

戦争と平和自分たちの問題として考えた沖縄平和ツアー

誕生日が原爆投下日と同じで戦争や平和に興味

私の生まれは、広島に原爆が投下された八月六日であり、幼いころから、戦争や平和について、漠然とした興味があった。一昨年には、念願の広島平和式典に参列し、原爆への恐怖や怒り、苦しみや悲しみなどの様々な感情をその場で抱き、戦争は二度と起こしてはならないと強く思ったのだった。しかし、その思いは日々生活をしている中で、なかなか蘇るきっかけもなく、抱いた感情が薄れていくさなか、職場の先輩より、今回の沖縄平和ツアーの話を伺い、改めて戦争や平和について考えてみようと参加を決意した。ツアーに至るまでは、事前学習会があり、参考資料の配布がされ、無知な私にはとても助かった。

沖縄戦争は本土決戦の時間稼ぎの戦い

ツアー一日目。沖縄地上戦が主な学習内容であり、ひめゆりの塔をはじめ、南風原陸軍病棟二十壕、糸数壕に向かった。沖縄戦は元々、本土決戦準備のための、時間稼ぎの戦いであり、軍隊は住民を守ることはなく、住民は決戦の舞台の道連れとなっていった。そのような戦いの舞台の裏側では、学徒隊という現在の中学生ほどの年齢の女子学生らが、負傷した日本兵の手当を行っていた。実際の手当を行っていた場所である壕は、入るなり、息苦しくなるほどの湿気と、狭く閉ざされた暗闇であり、手当をするような場所ではなく、地面は石や岩が転がり、足元を照らしていないと転びそうになってしまうほどだ。そのような中で学生たちは、日々増えていく負傷兵を手当てし、時には惨い処置の介助をし、食事や睡眠を摂る暇もなく、ひたすら動いていたのだ。また、銃弾の犠牲となる友人の死を目の当たりにし、家族とは会えない日々。深い悲しみや苦しみに耐え続けていたことを考えると、胸が締め付けられる思いになった。しかし、いくら命が助かったとしても、戦時中は捕虜になることは日本国民としての死を意味する戦い方をしていた。そのため、自ら命を落とす国民も多く、本来ならば助かっていた命も、犠牲となっていった。このような戦争の在り方は、同じ人間が考えていたとはとても理解ができず、亡くなっていった人々を思うと、悔やんでも悔やみきれない。

集落の中央に位置する巨大な米軍普天間基地

ツアー二日目。昨日の太平洋戦争終結につながる、戦後の代償として、基地が沖縄には数多く残る。報道ではよく、生活する住民の近隣で、米軍の離着陸の様子が観られるが、実際はどのような規模なのか、とても興味があった。

まずは辺野古への基地移設を条件とした問題が取り立たされる、普天間基地へ向かった。基地は集落の中央に位置し、周りには民家や学校、公共施設が立ち並んでいる。とても不思議な光景であった。訪れた日は、日曜日であったため、訓練は行われていなかったが、基地の存在自体が大きすぎる。万が一、戦闘機が墜落するようなことがあったら、と考えるととても恐ろしくなった。

ヘリパット建設予定地で座込む基地反対住民

今回私は初めて沖縄へ訪れたが、移動中の高速道路の左右を見渡すと、広大な森が広がっているが、そこはすべて米軍の地上訓練場所と知り、驚愕した。そのため、銃弾が高速道路にまで飛んでくることがあるというのだ。また、ヤンバルクイナや、ノグチゲラなど多様な生物が暮らす、やんばるの森も、高江ヘリパットの建設予定地とされており、その周囲では地上戦の訓練が行われているのだ。

ツアーでは基地を回るだけでなく、実際に基地建設に反対する住民の話を聞く貴重な機会にも恵まれた。辺野古ではビーチに建設されたテントがあり、毎日住民が交代で居座りを続けている。わたしたちはその場所で話しを伺ったが、そこから見える海の眺めはとても綺麗で、沖にはサンゴが流れついていた。建設予定のＶ字滑走路が建設されてしまったら、この眺めや、ここに生息する生物は一体どうなってしまうのだろうかと、不安にかられた。また、沖に広がる白い砂浜の上には、鉄条網で仕切られた場所にグルグルまきのワイヤーが掛けてあり、建設側と反対側の対立の現状が生々しくみられた。

高江のヘリパット建設予定地では、とても印象に残った方に出会うことができた。佐久間さんという方は、反対運動の座り込みを三年続けている。ご本人は、年金生活の身なので…と口にするが、三年という期間、一人で過ごしてきた姿は、自分がこの場所を守らなければならないという、使命感のようなものを感じた。また佐久間さんは私たちに、「ここを知って尋ねてきてくれただけで、これからも頑張ることができます。とてもありがたいです。」と深々とおじぎをし、笑顔をみせてくれた。

私は佐久間さんの姿をみて、涙がでそうになった。そしてこの時、ここで、座り込みをしている人がいるという事実を知ったことに、重要性を感じた。

沖縄の問題は日本という国に住む人々の問題

今回、沖縄平和ツアーに参加し、沖縄の現状を肌で強く感じることができた。戦争は事実上終結してはいるが、沖縄の人々は、歴史を学び、真実を自分の目で確かめ、認め、同じ過ちを繰り返さないよう、闘っている。そしてそれは、そこに住む住民の問題だけではなく、日本という国に住む人々の問題でもあり、一緒に考えなくてはならないことなのであると思う。

そのためには、まずは知ること。これが今、平和を願う私にできる初めての一歩だと思う。そして、友人や家族、職場の同僚に話をもちかけてみようと思う。

小児総合医療センター　　佐久間　友美